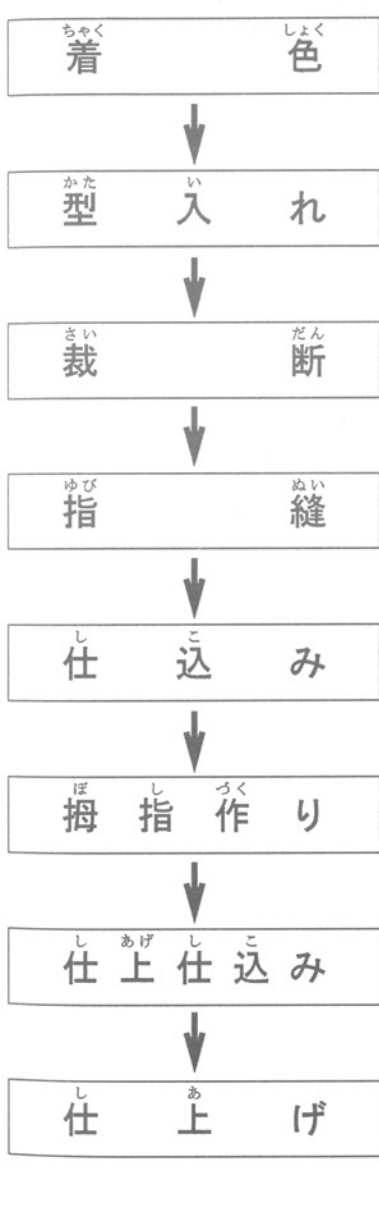


ゆがけの製造工程



ゆがけは、一匹の鹿皮から一つしか作ることができません。どこの部分で作るかを選ぶことから始まります。一番難しく、また気力も体力も使うのが、最初の裁断であり、指指作りです。注文者の手の形に合わせて作るので、手の大きさや特徴を手形から読み取って作っていく部分は、長年の勘が左右するところです。

型入れ

一匹の鹿皮から一枚のゆがけしかできないので、皮の一番厚いところに原型をあてる。手の大きさや、種類などによって、どの皮を使うか、また皮のどの部分を使用するかを決める。職人の選択眼が試される重要な作業のひとつである。

着色

わらを石油缶にいれ、下から火を付けて煙を出す。その煙を鹿皮にあてていぶす。紋を抜く場合は、この時、紋の型を張っておく。黒、紫、紺、茶などに、化学染料で染める。

指縫

裏側から型通りに縫ってひっくり返す。厚い皮を複雑な形に仕上げるため、一針縫うだけでも相当な力を使う。弓を引くとき強い力がかかるので、一針一針細かく正確に縫っていくのは熟練度が要求される。

裁断

注文者の手の形の寸法に合わせて、皮を裁断する。手形から、立体的なものに仕上げていくために、どの程度の余裕をみて裁断するかが技術の見せどころである。

指作り

木で指（親指部分）の型をつくり、型に合わせて牛皮を貼り指を作る。矢を引つける「つる道」の元になるため、微妙な調整に気を使う。

仕込み

コテで熱を加え、しわと縫い目をのぼし、指の部分など微妙な曲がり調整しながら、型を付け胴を作る。

仕上げ

紐を付けたり、最終的な化粧をする。普通は仕上げまでだが、注文によって抜き紋やうるし紋にしてその上に、金箔を貼ったりする場合もある。

仕上仕込み

指を胴に取り付け、その上に鹿皮をのりづけし、縫いつける。指指を胴につけるときの角度によって、かけの使い易さが決まるので、この微妙な角度のつけ方に、最も気を使う。